

〔書評と紹介〕

河西英通著 『「東北」を読む』

今野日出晴

本書は、地方出版社として地に足のついた出版活動を続ける、無明舎出版の創業四〇周年記念の出版物の一つとして二〇一一年に刊行された。「遅れた東北」というステレオタイプなイメージに対して、河西英通氏（以下、著者と記す）が、近世後期から現代までを射程にいれ、膨大な文献を博搜して、東北はどうみられ、どう語られてきたのか、一貫して、実証的に追及してきたことはよく知られている。「後進地東北」という「既成観念が固定化するのは戦後になってからである」（一一頁）ことを明らかにするとともに、それは、東北史を一貫した後進地モデルとして、「日本」や「日本人」を描いてきたという、戦後歴史学に対してのラディカルな批判を内包するものでもあった。

本書は、こうした問題意識から、「近代において東北史がいかに成立させられてきたのか」、これまで調査・収集してきた「新聞・雑誌など地域メディアのいくつつかを今日的視点に立つてもう一度読み直し」、「あらためて東北」が「いかなる社会、生きる場として論じられてきたのか」（二二頁）を著者とともに考えようとするものである。「東北人はいかに東北を論じたのか」という東北論として提出されている。

本書の構成は以下の通りであるが、ここでは、すべての章を同じよう

に順次紹介するのではなく、著者の議論をいくつかにまとめながら、評者の関心に沿って論ずることをお許しいただきたい。

序章 東北史に寄りそう

第一章 ふたつの『東北』——盛岡と仙台——

第二章 『奥羽新報』と『東北新報』——白河以北一山百文——

第三章 『東北少年』と『東北健児』——東北Ⅱスコットランド論——

コラム1 「会津」の魂

第四章 『文之華』『秋田少年雑誌』『東北之文華』——ナショナリズムの

誘惑——

第五章 東北精神党の世界——東北は泣けり——

第六章 『東北之燈』と『東北之光』——東北の宗教——

コラム2 「一等国」意識と『羽後新報』

第七章 『東北指針』と『東奥詞壇』——南東北の〈東北〉——

第八章 『東奥』と『新東奥』——ふたつの「東奥」——

第九章 『東北之産業』と『東北公論』——中心性のつなひき——

コラム3 『後進』の世界観

第一〇章 『北日本』と『東北経済新誌』——北方への視線——

第十一章 『東北評論』——世界大戦と東北人論——

第十二章 『東北日本』と『東北之研究』——東京発東北論——

コラム4 「東北」を考えるための二人

第十三章 『胎盤』『郷土運動』『地方文化パンフレット』『秋田文化』

——地方文化と地方主義——

コラム5 『共存共栄』の満州論

第四章 『東羽新報』—ある地方新聞の戦前—

第五章 『月刊評論』—翼賛する東北、飛躍する東北—

コラム6 東北の戦詩

終章 東北史の「発見」と「忘却」、そして「再生」

まず、序章では、著者自身の東北論を振り返りながら、戦後に基本的な東北イメージとして機能・定着する「後進地東北」という既成観念を批判する。まず、戦前において、「大根をかじる子どもたち」のイメージとして定着する一九三四年凶作をとりあげ、その要因が単純な冷害凶作ではなく、政策的無為による「凶策」であるとし、戦後一九五三年の「凶作」も東北地方に米生産が過剰に要請・強制されたことから生じたものであるとする。「凶策」の側面は忘れられ、「ひたすら東北の後進性ということが自明視され、東北民衆の性格も鈍重で寡黙で忍耐強いという宿命論」が語られたと意味づける。そして、「高度経済成長」においても、永山則夫の逮捕と三沢高校の準優勝という全く異なった二つのことが、「暗い性格」と「ねばり強さ」として、東北人気質に短絡して理解され、今回の東北大震災においても、寡黙で粘り強いというかたちで、東北イメージが一面的に発信されたのではないかと鋭く指摘する。さらに、東北大震災は、東京電力の原子力発電所が、南東北に建設されていたという「原発植民地」としての位置を明らかにし、「国の犠牲区域」のごとく、「東北を外部から構造化・機能化する動きは近代日本において一貫している」(二〇頁)ことを剔抉する。

まず、第一章では、「戊辰戦争の敗者としての記憶」から、自由民権運動が(第二の維新)として推進された理由が読み解かれる。「戊辰革

命」において、東北は「方針」を誤って敗北したが、勝利したはずの薩長は「維新革命」の目的を忘れ、藩閥を固守するものとなった。それゆえに、「純正なる自由主義」で「藩閥政府を打倒し責任内閣」の実現をはかるべく、(第二の維新)がめざされた。東北において、自由民権運動が推進されなければならなかった理由がここに示される。第二章では、「白河以北一山百文」という、侮蔑的表現が、明治維新から一〇年余り経過したなかでの「戦後的言説」であったとされ、その侮蔑的な視線を跳ね返して、東北人が天下国家を担おうとする気概が導き出される。同時に、外部から東北を一体のものとして塗り込めようとする視線に対しても、(東北)内部の格差や分裂性を自覚する意識を抽出する。第三章では、少年雑誌のなかから、欧州において北方のスラブ民族が未来への希望を託されているように、あるいは、英国において「北英国」のスコットランドが大きな勢力を持っているように、東北も、「北方の強」として台頭するという議論を見出す。いずれの章でも、戊辰戦争の雪辱を期すというかたちでの論理と実践が大きな主題として抽出される。

第四章では、日清戦争を契機にして、東北意識ではなく日本意識が前面に出てくることが示される。「排他的なナショナリズム」は、「日本魂」の鼓舞として表現され、「日本魂」は、日本精神となり、東北精神へとつながっていく。第五章では、東北の境遇に怒りを覚える無名の青年たちによって結成された、東北精神党の世界が明らかにされる。その主張は、東北さえ良くなればよいというものではなく、国家の現状を憂うるもので、その目的は日本にあった。帝国議会開設というナショナルな統合の動きが日本を覆っていく状況において「東北精神」というリー

ジョナルな価値を掲げていたことが評価される。第六章では、宗教雑誌のなかにも東北意識を見出し、第七章では、「東北精神」がより明瞭に政治的主張として読み解かれる。「東北の独立」ということが、東北だけの利害にこだわった排他的な割拠主義ではなく、「一郡一州の独立は即ち国家独立の基礎」であるという認識のもと、国家独立へ向かって天下国家を論ずるものであったことが明らかにされる。陸羯南が「政治思想を有するの人民は即ち自治心を有するの人民なればなり」（九四頁）と断じたところの「政治思想」Ⅱ「自治心」こそが求められていた。そして、洋の東西を問わず、文明の主体が南から北へ移動することを前提に東北を位置づけようとする、いくつかの北優南劣論が読み解かれる。

第八章では、一八九一年に東北線全線開通によって、青森県の「旧様故態」のあり方を見直すべきであるという議論が、東奥義塾のネットワーク、青森県政界の動向とともに素描される。第九章では、その交通体系の変化などによって、宮城県が次第に衰退して「失意の地」になるという自己認識のもと、その打開策として東北大学設置の議論が紹介される。一方では、「仙台Ⅱ東北の中心地」というステレオタイプの認識が足もとから揺らいでいることを示すが、他方では、仙台にかわって実勢上の中心を秋田に求めようとする議論が示される。東北が、相互に利権がぶつかりあう場であり、「東北」というアイデンティティの掌握をめぐる争い合う空間であることが明らかにされる。また、第一〇章では、日露戦争後、日本の帝国主義的海外膨張を背景に、ますます西南日本が発展するという予測のもと、北海道を主力とする北方経済圏（東北・北海道・南樺太・千島列島など）を展望する議論が紹介される。さらに、

具体的な経済振興策（低金利金融策など）で、東北への救済策が講じなければ、第二のアイランドになるという危機意識があったと指摘される。

第一一章では、第一次世界大戦という国際情勢のなかで、「明治維新の順逆」につまずき、東北は「落伍者の境遇」に陥り、後進の北海道にも及ばないという認識を背景に、さまざまな「東北自強論」が抽出される。それは、世界大戦の国民意識の覚醒のなかで、中央の文弱からのがれ東北の武強が形成されたという文脈で、東北人を「武強国民」として、国民のなかの国民として、位置づけるものであったとする。

第一二章では、第一次大戦後の経済的な振興策を、東京から発信された東北論として読み解き、第一三章では、社会主義者の郷土主義運動や伝統主義者の地方主義運動が紹介される。これらは、第一次大戦後の不況や関東大震災による首都壊滅をうけて、経済振興政策として、あるいは、反都市的な地方文化、農村文化の運動として、地域を組み立てようとするものであった。第一四章では、東北振興会などの動向をうけて、「東北振興」の声に聞き疲れた人びとの声を拾い上げる。海外移住や都市への出稼ぎなど、いくつもの東北振興策は語られるが、東北に残された「山河と田野」はどうなるのか、果たして何を振興しようとしていたのか、根本的な問いが見出される。現在の「東北復興」に重なる重要な論点が見出されている。第一五章では、一九三〇年代から四〇年代にかけて展開する東北論が紹介される。東北が、満州と近接し、気候や生態系でも類似の環境であると主張され、戦時期の東北振興が中国支配を含んだ国土計画であったと指摘される。また、大成翼賛会が指導する文化運

動の盛んな地域として、東北があげられ、地方文化運動の中心として位置づけられる。「翼賛する東北」の姿が明らかにされている。そして、

「東北精神」といわれるものの思想的基盤が、「東北人が自然の圧力を克服し来たった生活の中に求められなければならない」という、「生活感情の遅しさ」に求めようとする議論が提示されたことは重要であろう。

終章では、原勝郎の「北人の天職」がまとめて紹介される。原は、文明の主体が南から北へ移動するのであり、日本でも、南人の手によった「明治の文明」を調節し、健全な方向に発展させることが「北人の天職」であるとした。しかし、それは直ちには実現せず、「北日本における文明的後進性」が生まれてしまい、それは、国家の関心が海外に移ったことによる。つまり、筆者によれば、原は「後進東北の主因は、近代日本の帝国主義的海外膨張政策にあり」と認識していたのである。

戦後歴史学をリードした石母田正は、江戸時代でも東北地方は、「後進的な辺境」であり、明治維新が偉大なる解放戦争であったとき、東北は「反革命の最大の拠点」であり、近代の戦争において、東北の農民がいかに天皇の忠良にして頑健な歩兵であったかと位置づけた。筆者は、ここにいたって、東北は（後進）がたんなるレッテルではなく、本質規定として東北社会に付与され強固に刻印されてきたと意味づける。そして、遠山茂樹が、沖縄史研究が、単なる研究ではなく、研究者の姿勢が問われる歴史的課題であるとして、「沖縄県の歴史は、青森県の歴史と同列ではない。たんなる地方史ではない」と表現したことを厳しく批判する。こうした認識によって、青森県史のみならず、東北史全体は「たんなる地方史」に押し込められ、「歴史的課題」とは見なされなかった

と指摘する。引き続き東北は「忘却」と「軽視」の彼岸へと追いやられてしまったと、戦後歴史学に反省を迫るのである。それゆえ、東北史、東北の歴史世界それ自体を忘却の彼岸から呼び戻し、此岸で再生させることを提唱し、「東北史はたんなる地方史ではないし、たんなる地方史などおおよそ存在しない」という力強い言葉で締めくくられる。

本書は、東北の多様性や相違性、対立性や分裂性に着目することによって、あるいは、東北の内部に自閉するのではなく、国内外の他地域との関連性に注目することによって（特に、地域を編成しようとする国家の政策との関係）、近代東北がそれぞれの地域で生みだした地域メディアの言説を読み直し、新たな東北史を展望しようとする近現代史研究である。しかし、私は、単なる歴史研究として読むことができなかった。

まず、震災後の「東北再生」、「東北復興」のために現在語られていることのいくつもの原型がすでにこれらに見られることに率直に驚くのである。帝国日本の海外膨張とともに、海外移住が奨励されるなか、東北に残された「山河と田野」はどうなるのかという、過去からの「問い」は、地域の産業や生活を置き去りにしたまま進められようとする、現在の「東北復興」に対しても、真つ直ぐに突きつけられている。あるいは、政策を考えなければならぬからこそ、陸羯南の「政治思想」Ⅱ「自治心」は、本当に私たちの身につけているのかというかたちで迫ってくる。コラム2では、日露戦争後に日本が抱いた「二等国」意識と東北が抱いた脱落感・埋没感が指摘され、それは、「対外進出志向」と「あくまでも東北は遅れているという認識」として意味づけられ、「この二つはアンビバレントなまま東北にまわりついていた」（八六頁）と指摘さ

れる。そして、コラム5では、東北以外の他地域の「農人では満蒙に進出して寒暑に堪え困苦欠乏に忍び開拓の功を収める事」ができないとして、「岩手農人」こそが相応しいというかたちで、東北の優越意識が看取されるが、その一方で、満州国建国は農産地という点で東北を凌ぐものとなり、「庄迫」になるとして、東北の開発が無視されること、東北の「陥落」が嘆かれる。ここにも、二つの認識、傲慢な優越意識と卑屈な劣等意識とは、手を携えて歩んでいる。

「震災からファシズムへ」という不気味な道筋を考えると、やはり、アジア・太平洋戦争において、勇猛な東北健児というかたちで、戦争遂行を担った東北人の決定的な役割を見過すことができない。「対外進出」を担うことこそが、東北人の活路であるとして、つまり、戦争と植民地獲得を媒介にすることによって、卑屈な劣等意識が、皇国日本の崇高な使命の担い手という誇り高い優越意識（国民のなかの国民）へと転化していったとするならば、そうしたかたちでのみ「白河以北一山百文」の劣等意識が払拭されないとすれば、そうした東北とは、果たして何なのか。現在までにつながるかにみえる、この課題は容易なものではない。

筆者は喝破する。「白河以北一山百文」という忌まわしいレッテルが再生産されるかもしれない、しかし、東北が一山百文になるということは日本という国全体がいつの日か一山百文になるということなのだ、とおそらくは、この地点にたつて、東北の現在の姿が、日本の未来の姿になるといふ歴史的想像力のなかで、考え続けることが、さきの課題への幾通りもの選択可能性を切り拓くものになるように思う。本書は、東北

論に「前進する志を発見すること」（二二頁）によって、それを果たそうとしているのであり、今後の議論の方向性を鮮やかに示している。

（四六判、二二三頁、二〇一一年一月刊、価格一七八五円）

（こんの・ひではる 岩手大学教育学部教授）